

「島根県
消防学校だより」

【主な行事】

・6月23日
全国消防学校長会

・8月10日
オープンキャンパス



・9月13日
鳥取県消防学校との
合同訓練



・9月30日
スーパー錬成
宍道湖一周マラソン



まえがき

青春とは、聞き慣れた言葉です。

季節を表す青春（せいしゅん）、朱夏（しゅか）、白秋（はくしゅう）、玄冬（げんとう）のワンセットのひとつで、それが転じて人生における若く未熟で、しかしながら元気で力に溢れた時代を指すようになったようです。

案外知らない人も多いのではないのでしょうか。もちろん私も、その一人でした。

私たちの人生と重ね合わせてみると、なんだか青春という言葉も淡く感じてしまいます。

そんな青春時代をこの消防学校で過ごす学生たちは、今、何を思っているのでしょうか。

『僕（私）は、こうして消防士になった』：

今回、学生にお願いしたタイトルです。

それぞれが、それぞれの考えで今がある、百人以上百様なちがってみんないい、そんなふうに思いたい、と私は思いました。

消防士としての知識や技術の修得もおぼつかない不器用な青春が、この消防学校にもあります。

私は、もともと消防士になる気はありませんでした。

体育の先生になりたかったので、スポーツや健康について学べる大学に進学しました。

スポーツや人体解剖、運動生理学を深く学んでいくうちに、スポーツトレーナーやパーソナルトレーナーになることが夢に変わっていました。

四年時の就職活動の際には、公務員は全く眼中になく、とにかくスポーツ関係の仕事をしたすら調べていました。

夏頃になると友人は着々と内定がきまり、残りの学校生活を謳歌しており、なかなか内定が決まらなかった私は、自暴自棄になっていました。

そんな矢先、突然体をこわして入院してしまいました。



就職活動は来年にしようとなれば諦めかけていました。

そんな私に父があるパンフレットを手渡ししてくれました。

それが消防試験の内容が書かれたパンフレットだったので。

それからは毎日十時間勉強し、なんと合格することができました。

あの日、私を救ってくれた父には感謝しています。

宮廻 将吾



私が消防士になったきっかけは、祖父の体調不良です。

こころ、二年入退院を繰り返しています。

八十才を過ぎての夫婦二人住まいなので、数年前から私に同居して欲しいと言っていました。

私は大好きな自動車関係の仕事に就き、小さい頃からの夢であるテストドライバーの部署で働くことがかり考えていました。

土日には、サーキットでタイムトライアルやレースに参加しながら腕を磨き、自動車整備やチューニングをするなど非常に充実した日々を過ごしていました。

そんなある日、放任主義の母が、祖父母と同居してほしいと言ってきました。

正直なところ、職場を去る気はなかったのですが、求人があればと返答しました。

しばらくして、祖父母や両親から「出雲消防を受けたらどう」と連絡がありました。

受験しても受かるはずもないし、落ちたらそれを言い分けにして、もう何年か栃木に居よう、そう思っていました。

観光もかねてという気楽な気持ちで受験したのですが、どういう訳か合格してしまいました。

祖父母にいわれるがまま、今ここに居ます。

遠藤 裕輔



私は小さい頃から、人の役に立つ仕事がしたいと思っていましたが、具体的に何をしたいのか決めていませんでした。

中学生になり少しずつ自分の将来のことを考えるようになったとき、一番に思い浮かんだ職業が消防士でした。

私の父が消防士であることや消防車を見ることが大好きなので、興味を持ったのだと思います。

それからは、消防の仕事を知ろうと思い、職場体験に参加したり、見学に行ったりしました。

現場へ出る消防士の姿はともかくこよく、私も消防士になってかっこよくなりたと思いました。



また、女性が少ない職業であり、少々目立ちたがりで他の人があまり

していないことをやってみたくとも思いました。



こうした性格も後押ししたのでしよう。

大好きな消防車を毎日見ることができ、さらに人の命を救うことのできる消防士という職業は、私にとってとても魅力的です。

鳥谷 香子

僕は小学生の頃、自宅が全焼する火災に遭い母親を亡くしました。それからは様々な困難を抱えることになりましたが、それでも多くの人に支えられ助けられてきました。

高校は進学校だったので、まわりの同級生たちは大学進学に向けて熱心に勉強していたように思います。

僕は、特にやりたい分野もなかったので、大学進学は考えていませんでした。

将来を考えていたときに、母を亡くしてからのことを思い出し、今日まで自分を支えてくれた人たちに対し、少しでも恩返しのできる仕事はないか、そういう思いが湧いてきました。

そうだ今度は自分が支えていく側だと強く思うようになり、こうして消防士をめざします。

尾添 太一



赤い車に白い車、街で見かけるかっこいい車がずらりと並んでいる光景は、大変強烈でした。消防署は、小学生だった私には、とても印象深いものでした。

それがいつの間にか消防士への憧れに変わっていったと思います。

高校までは、消防士になるうという気がなかったのですが、将来のことは考えずに大学へ進学しました。

あっという間に三年間が過ぎていきました。その頃からようやく自分の将来について考えるようになりました。仕事に就くというこ



とは、人生の中でとても大きな選択であるにもかかわらず、自分がしたいことも分からず、何もきめられないまま、月日だけが過ぎていきました。

気づけば大学卒業が間近に迫っていました。

そんな時、消防士を志望する友人と話をする機会があり、自分でも消防の仕事調べをはじめました。

本格的に消防士をめざすようになったのは、



その頃だったと思います。

しかし採用試験を受けてもすんなり合格するはずもなく、落ちてはアルバイトと勉強を地道に繰り返す日々が続きました。

この期間は、今までの人生でとても辛いものでしたが、諦めることなく続けたので、消防の試験に合格することができました。

今は、赤い車や白い車に囲まれ、一人前になるために頑張っています。

石川 裕



私は、高校を卒業したら大学に進学するつもりでした。

しかし、両親から「半端な気持ちや目的も無いなら大学にはいかせん」と言われました。

どうしようかと悩んでいたら、消防団員である父が、消防の魅力や活動のすばらしさを話してくれました。

父がそこまで言うのであれば消防士になってみようと思ったのです。

これも親孝行の一つだと考えたからです。

救命士の資格を取得すれば採用条件も良くなると思います、救急救命士育成の専門学校に進学しました。

無事に救急救命士の資格を取得したので、



松江市消防本部の採用試験を受けました。

結果は、不合格でした。

それから、左官業を営んでいる父の手伝いをしながら、毎年採用試験に挑戦続けました。



しかし、なかなか合格することができなかったので、諦めて違う道を選ぼうかと思っていました。

そんな時、救命士枠が新設されることになったので、最後のチャンスと思い受験したのです。見事に合格しました。ようやく掴んだ消防士への道、一生懸命頑張ります。

加藤 凧二

私は、高校生の時に将来は体育の教員が消防士になりたいという漠然とした夢がありました。

体育の教員になるために、体育大学に進学して免許を取得しようと考えていました。

しかし、大学で教員に関する勉強をしていくうちに、理想としていた教師像と現実に大きな違いがあるのでないかと疑問を抱くようになりました。

教員採用について調べると、体育に関しては倍率が高く、また何年も講師や非常勤講師として働きながら教員を目指す人が多いことも分かりました。

その時に思ったのは、疑問を抱えたままだと必ず後悔するというものでした。



自分が納得できる仕事は何か、体力には自信があったので、これを生かせる仕事に就こうと考えました。

また、大学時代は大阪にいたので、生まれ育った地元で働きたいという思いもありました。

この二つの条件を満たす職業が消防士だったので。

少しでも、地域の人の力になれる消防士になりたいと思います。

堂面 翔太

